



話題の本棚

山内朋樹著『庭のかたちが生まれるとき 庭園の詩学と庭師の知恵』

ピョートル・セミョーノフ=チャン=チャンスキイ著、樹下節訳『天山紀行』

特集／動物

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

徹底的に庭を見よ！——庭のレシピを書き起す

庭のかたちが
生まれるとき

庭園の詩学と庭師の知恵

山内朋樹著

フィルムアート社



「歩かせえよ！ 力なんかいらんのか。石に歩かせらんやで！」
庭師の古川が声を荒げる。現場に緊張が走る。庭づくり中のある一
場面だ。しかし待てよ……と疑問が湧く。石に歩かせるとはどつう
うことか？ 石が歩くことなんてあるのか？ 石に意志などあるの
か？ 謎が謎を呼び、謎が深まってゆく。まるで推理小説のように。

*

京都は福知山に鎮座する古寺、補陀洛山観音寺。二〇二〇年に開
創一三〇〇年を迎えたこのお寺では、これを記念して庭を新たに作
り直すことになった。その知らずを受けた著者は、車を飛ばして福
知山へと向かい、庭のフィールドワークを開始する。その記録をま
とめ、それに考察を加えることで、本書は誕生した。「庭のかたち
が生まれるとき」に立ち会い、その過程を記録するところ、そして最
後には、庭の秘密を解明すること、ここに本書の目的がある。

ここで言う「庭の秘密」とは何か。それは要するにこういうこと
だ。私たちが庭を訪れるとき、庭はすでにできあがっている。石は
すでにそこにあり、木もまたすでにそこにある。それゆえ「この石
はなんでこんな配置になっっているんだろっ？」あの木はなんであんな
なかたちをしているんだろっ？」という問いは、行き場をなげいて

しまつ。庭に置かれた物体の配置はなぜそのようになつたのかとい
う「庭の秘密」は、いつまでも明らかにされないうままなのだ。

そこで著者は、この秘密を解明し、「庭のレシピ」を書き起ごそ
うとする。それも「物体の配置の理由それ自体を、物体の配置その
もののなかに見ようとする」ことだ。これは庭のかたちの「内在的
理解」と言ってもいい。たとえば美術館を訪れるとき、私たちはよく、
作品のキャプションを読むことで、作品を理解した気になつて
しまつ。これは、当時の時代背景などから作品を理解する「外在的
理解」だ。しかし著者が求めるのは、作品を作品それ自体から理解
すること、つまり徹底的に作品を見ることで作品を理解することだ。
それゆえ本書のモットーはこうなる——「徹底的に庭を見よ！」

本書を面白くしているのは、庭師のリーダーである古川が発する
言葉ではないかと思う。冒頭で引用した言葉もそうだが、古川はほ
かにもこんな言葉を残している。どうやって石の配置を決めている
のかと問われて——「平安時代の難しい本には『こほんにしたかひ
て』って書いてあるんですわ。それは石が『求める』ところにしたが
う』ということだ」。古川によれば、石は「求める」。庭師はそ
れゆえ、その求めるところにしたがって、石を配置することになる。
庭づくりのプロセスにはつまり「庭師の意図だけでなく石も参与し
ている」のである。これはいわば石の「擬人化」だが、本書を読め
ば、古川が発する不思議な言葉たちの意味もわかるようになる。

「早く庭を見てみたい！」——本書を読んでから、このはやる気
持ちを抑えられない。今度、近所のお寺を訪ねてみようか。(はや)

(三三四頁 税込二八六〇円 8月刊)

一八五〇年代・激動のロシア——天山山脈への踏査記録

天山紀行

ピョートル・セミヨノフ
 〓チャン〓シヤンスキイ著

樹下節訳

河出書房新社



本書は、一八五六年から一八五七年にかけて天山山脈（現・カザフスタン、キルギス周辺）を踏査した、ロシアの地理・植物学者のピョートル・セミヨノフ〓チャン〓シヤンスキイの手記……というよりも、調査記録である。著者は大学の恩師が翻訳をはじめた『アジア地理』の補遺を作ることを目として、天山山脈での調査を希望した。

筆者が冒険に出ようと試みた時代は、ロシア国内で「農民開放」改革を前面に進めていた時期であると同時に、クリミア戦争の終結年であったことから、国内情勢が非常に不安定であったことが窺える。筆者の体験記の端々には、丁寧な言葉を使いながら痛烈な官僚批判が展開されている。これを楽しみの一つとして読み進めてしまったほど、華麗な隠喩が散りばめられている。

『研究バカ』な著者である——天山踏査の長期調査許可を確実なものにするため、本研究に掛かる費用のほとんどを自分で出資することを申し出た。それほど楽しみにしていたはずの調査であるのに、本書には著者の感情が直接的に描写されている場面がほとんどない。なんと、自身が新種の植物を発見した時にすら、感情の描写はなく、淡々と事実を描きだしているのである。しかし、読み手側にはなぜ

か研究者としての興奮が伝わる。不思議な感覚である。

人が住んでいないような場所では、その土地に見られる植物や地層の様子が淡々と記録されている。その一方で、天山山脈周辺では、その場所に住む民族との交流も色濃く描き出されている。ロシアの小説家として知られているドストエフスキイとの交流や彼の結婚に一役買った話や、キルギスで遊牧民間の結婚に係る係争事件の最高審判者に任命される話など、研究以外のエピソードも満載である。

里程標として「アジア」と「ヨーロッパ」という、今では考えられないほどの曖昧な表記が行われている時代のロシアと中央アジア……文章だけ読んでも想像することが難しい世界を、時を越えて現代人に伝えている。この事実だけでも途方もないロマンを感じる。

*

河出書房新社が刊行している『世界探検全集』は、二〇二三年九月から、ほとんど毎月のペースで刊行されているシリーズである。このシリーズでは過去の探検家による手記を翻訳しており、探検にまつわる各国の古典を楽しむことができる。本書もこのシリーズの一冊であり、約一七〇年前に描かれた手記の訳である。そして、このシリーズの本で非常に面白いと感じる部分は各書で取り上げられている場所や冒険に関係のある、著名な作家などがナビゲーターとしてはじめの数頁に書評のようなものを書いている点である。知っている作家の方がナビゲーターを務めている一冊から手に取ってみるのも悪くない。

（フナチ）

（三三〇頁 税込二五三〇円 9月刊）

〈特集〉

動物



私たちは、人間以外の動物を指す意味で「動物」という言葉を使いがちだ。実用上しかたないと思う反面、なかなか身勝手な人間の尺度だよな、とも思う。

本特集は「動物」について扱うが、この試みもやはり、人間的な見方から抜け出せはしないだろう。なぜなら、人間が思い描き、人間の言語で著されたものに対し、人間が書評を行うからだ。

それでも、両者の隔たりは絶対的なものではない。尊大になることなく、動物を同胞として捉えることはきっとできる——そしてそのヒントとして、人間の考えを通してこそ得られるものもあるはずだ。「動物」と真剣に向き合った先人の足跡をいま訪ね、共に今後について考えよう。（朝露）

動物を通じて語る——文学のなかの動物たち

実家には弟がいる。白いミニチュアシュナウザーだ。この子に会うために帰省するといっても過言ではないほど溺愛していて、そんな彼の幸福を考えうるうちに『動物の幸せ』についても考えるようになった。彼らの幸せを願いつつ、ここでは文学が描く動物たちの姿をみていきたい。

一番手を飾るのは、古代ローマの著述家・アイリアノスの『動物奇譚集1』（全二巻／京都大学学術出版会）。鳥獣虫魚から幻想動物に至るまで、動物に関する伝承と観察が七九二の項目にわたり記される。興味深いのは、それらが単なる伝聞の羅列とはならず、人間の生活や習性との比較を交えて語られていることだ。例えば、強い性欲が仇となって捕まえられる武鯛の性質を語るとき、そこには人間の過剰な性欲に対する戒めを読むことができる。曰く、雄の武鯛が「雌に近づき身を擦りつけようと焦るのは、恋に狂った人間が口づけとかいちゃつきとか、果ては秘密の情事を物にしようとするのと異ならない」。網の中にいる雌を見るやいなや、「雄の武鯛も一緒になだれこみ、捕まってしまうが、こうして性欲の罰を受けるわけである」。

動物たちの生き様を通じ、人間自らの生を省みるよう促す言葉が本書には少なくない。そこには、現代の脱人間中心主義とは異なれど、生きとし生けるもの全てに対する先人たちの驚嘆と敬意を見て取ることができるだろう。

さて、時代は下り近代でも、先の書と同じ名の著作が編まれた。二〇世紀を代表するイタリアの作家ディーノ・ブツァーティの短編集『動物奇譚集』（東宣出版）である。不条理小説・幻想小説の書き手として名高いブツァーティが描く動物たちは、様々な寓意的機能を担いつつ、当時においては先進的にも、人間の愚かさを動物の視点から糾弾する。



この点に関して、「川辺の恐怖」は印象的な一話である。多様な動物が集う平穏な川辺、調査のためにかの地へやってきた人間たち。彼らに悪意はなかった。が、「ポート」が川を進むにつれて、何世紀ものあいだ存在してきた目に見えぬヴェールが静かに、そして永久に破られ「いった。動物たちは逃げた。彼らに

もなぜ逃げねばならないのかわからなかったが。我々人間は「開発」のために動物たちの生活を壊していく。そこに積極的な悪意はないのかもしれない。それでも、動物たちが経験するのは、まごころなき大災害なのである。

「自分とは違うもの」に対する人間の想像力の欠如、そこから生まれる惨禍をアツツァーティは描き出す。鋭く、だが動物たちへの愛に満ちた筆致で。身の毛もよだつカメラ実験の顛末を語る「アスカニア・ノヴァの実験」、人間と犬の主従関係が逆転した世界を皮肉たっぷりに描く「警官の夢」、人間の身勝手な実験に付き合うチンパンジーの諷刺的なモノローグ「チンパンジーの言葉」など、本書に収められた全十の作品が「動物とはなにか」「人間とはなにか」、そして「現在の世界」についての再考を迫るものである。

人間が動物に対し築いてきた「現在の世界」に対する警鐘は、ディストピア小説で名を馳せる英国の作家ジョージ・オーウェルの名作『動物農園』（中央公論新社）においても力強く鳴り響く。過酷な労働を強いられた動物たち。彼らは自己の尊厳をかけて蜂起し、農場の自主運営に成功する。しかし、知能の高い豚たちの独裁が、かつてと変わらぬ悲惨な生活へと彼らを押し戻していく……。

全体主義とソ連への非難が謳われた作品と

して名高い本小説。体制批判としての解釈も当然重視すべきだが、その一方で忘れてはならないのは、本作を貫く根本的な要素、すなわち不当に搾取される動物たちの存在である。作中で動物たちを啓蒙する老いた豚は言う、「人間は何もしないで食べる唯一の動物である。」「……我々が人間をなくしさえすれば、我々の労働で得られるものが皆我々のものになる」と。今は、この言葉を真っすぐに受け

動物の多様なコミュニケーション

文学が人間の言語で成り立っている以上、それらが描く動物像は人間の見方に偏っているといえる。そこで、本節では言語に限らない動物のコミュニケーションを取り扱う。

まずは『動物の言葉 驚異のコミュニケーション ション・パワー』（日経ナショナル ジオグラフィック）を紹介しよう。色々な生物の美麗な写真と、二〇二〇年時点での研究データが並ぶ様は壮観である。だがその実、人間がコミュニケーション手段として絶対視してきた言語への過信を打ち壊す目的を有す。これまで、他者の考えを押し量る能力や意図があり、それらを言語で表現できればコミュニケーション能力があるとされてきた。だが、これは人間が知覚できない事物を無視した結

取ってみたい。するとどうか、我々人間に対し動物たちが向ける率直で悲痛な叫びとしてこの言葉が映りはしないだろうか。

ところで、ここまで取り上げてきた文学のなかの動物たちは、時に語り合い、時に嘆きの言葉を吐いていた。小説の中だから？ いや、案外そうではないらしい。ということでは、彼らの「コミュニケーション」に光を当ててみよう。（はらん）

果である。あくまで言語はコミュニケーションの一形態に過ぎない。

それゆえに、本ムックはコミュニケーションを「情報を伝達するための進化をあまねく網羅するもの」と捉えることを推奨する。この捉え方をすれば、人間以外の動物もコミュニケーションを行っていることが分かる。例えば、ヘラジカは生活圏にある木に体を擦りつけ、同エリアにいる生き物にメッセージを残す。人間のコミュニケーションにおいてさほど重視されない「におい」は他の動物にとっては生命線という良い例だ。このように、本ムックは動物たちの多様なコミュニケーション手段を例に挙げ、動物に対する偏見を解きほぐしていく。

本ムックで、何度か取り上げられている動物がいる。それがクジラだ。二〇二〇年時点ではどのクジラが話しているかの判別が限度だったようだが、時を経た今、クジラとコミュニケーションを試みる研究が進められている。その詳細を知れるのが『クジラと話す方法』（柏書房）である。著者のト



ム・マスティルは、三〇トンのザトウクジラが自身の上に落ちてきて死にかけて経験がきつかけとなり、クジラの世界へとめり込んだ人物だ。

クジラの鳴き声に「連の配列シグネチャーがありそれを「歌」と呼べること、ヒット曲を量産するクジラのグループがいること、歌のパターンによって意味が変わること等が明らかになっている。中には、録音した歌を用いてクジラとの意思疎通に成功したかのように感じる研究者もいる。しかし、この歌を、人間とクジラのコミュニケーション手段と考えるのは危険だ。これは「動物の擬人化」であり、人間の認知で動物の考えを捉えようとしているからだ。にも関わらず、これまで人間は動物の擬人化に固執してきており、その結果「動物言語」という言葉が生まれたのではないか。

動物言語とは文字通り、動物が使っ言語で

ある。そして、言語には発話がついて回る。生物学上では、発話は「人間の言語にとって好ましい出力アウトプットの様式」と定義される。この定義に則れば人間以外の動物は発話できないことになり、動物言語は存在しないことになる。だが、動物は人間と世界の見え方が違つたため、人間が思っ発話をしなかった。ゆえに、動物のコミュニケーション手段を「言語」で一括するのは不適切といえよう。

結局、著者はクジラと話すには至っていない。いつ話せるようになるかも判然としない。AI技術等の発展によりクジラとコミュニケーションが取れる日は彼は夢見ている。

最後に『動物たちは何をしゃべっているのか?』（集英社）から今後必要なることに目を向けよう。京大前総長かつゴリラ学の権威・山極壽一（一名誉教授と、気鋭の動物学者でシジュウカラ専門家・鈴木俊貴准教授の対談

「動物倫理」——彼らと対等に向き合う思想

普段何気なくひとまどめひとまどめにしている「動物」たちを改めて眼差すと、それぞれに愛らしさを覚えるだけでなく、その能力や生きてゆく営みの豊かさに新鮮な驚きも覚える。動物たちは、私たち人間と同じように何か鮮やかな感情を伴って生きていくように見え、一

が書籍化されたのが本書だ。両名は、動物たちの言葉や彼らの心、ヒトという動物、そして現代社会で偏重される言語について語り合う。

途中、動物の言葉について鈴木氏は次のように述べる。「人間と動物という二項対立から離れて、もっと俯瞰的な視野から言葉や人間の能力とは何なのかを理解する必要があると思うんです」。

文字を発明し、言語を得た人間は時空を超えたコミュニケーションが可能になった。ところが、その代償として言語化できない情報を切り捨ててしまった。一方、動物は人間が切り捨てたもの、そもそも知覚できないものを知覚している。人間にはできないが動物にはできることがあるという事実を目を向けることから、鈴木氏の言う「俯瞰的な視野」の獲得が始まる予感がする。（前髪）

方で、人間には決して正確に想像できない仕方での世界を経験しているようにも思われる。このことに思い至る時、動物と人間を序列シリアルにつけない「俯瞰的な視野」から、常識を覆すある問いが生じてくる。

動物を、人間より地位の低いものとして残

酷な仕方でも扱うことは、倫理的に問題があるのではないか。このような問いを扱う応用倫理学の分野が「動物倫理」である。その中心的人物として名前が挙がる論者の一人が、ピーター・シンガーだ。人間を殺したり苦しめたりしてはいけないが動物はその限りではない、という我々が暗黙裡に採用している姿勢を、彼は人種差別になぞらえた「種差別 (speciesism)」という言葉を用いて批判し、「動物解放論」を展開する。

そんな彼の記念碑的論文「動物の解放」を収録しつつ、一五〇頁と手取りやすいサイズで彼の数々のエッセイ、論考がまとめられているのが『なぜヴィーガンか? 倫理的に食べる』(晶文社)

だ。いわゆる「最大多数の最大幸福」を



目指す功利主義の立場から、動物の快苦も考慮に入れるべきだと論じる彼の論理は、シンプルでわかりやすい。そして、動物の神経系についての科学的事実や畜産と動物実験の残酷な実情が、議論を下支えする根拠として説得力を与えている。

タイトルからわかる通り、本書でシンガーはヴィーガン、つまり動物由来の食品や製品を利用しない人になることを、様々な観点から勧めている。しかし動物倫理の入門として

本書を紹介するにあたって私が強調したいのは、彼はどこでも倫理学者であって「動物好き」ではないということだ。ヴィーガンは感傷的な「動物好き」だ、という偏見が残念ながら存在している。彼らの理路には、そのような先入観を排して一読する価値があるということをも、読者諸賢にお伝えしたい。

動物解放論の第一人者シンガー自身の書籍を、敢えて入門と位置づけてご紹介した。よって次は、倫理学という学問全体を俯瞰しながら、動物倫理をできるだけ客観的に捉えてみたいと思う。それには、功利主義からではなく「動物の権利」の概念から動物解放を訴える立場や、シンガーに対して批判的な立場などが解説されている『動物からの倫理学入門』(名古屋大学出版)が最適だ。

本書の内容の充実ぶりは、入門というよりもむしろ教科書といえるほどである。それもそのはず、本書はその構想において、動物倫理を取っ掛かりとして倫理学全体を学ぶことが意図されているのだ。人と人の間の倫理を動物倫理から学ぼうとする、と言うと奇妙に聞こえるが、「倫理が対象とするのは人間だけでなくよいのか」という問いを踏まえるならば、本書の構成自体が示唆的であると言える。

最後に、動物倫理を既存の枠組みに囚われず論じる『荷を引く獣たち——動物の解放と

障害者の解放』(洛北出版)を紹介しよう。

本書では、障害の当事者であり動物解放運動の担い手でもある著者が、自身の体験、様々な活動家との対話、学術的研究を織り交ぜてアイデアを語る。それは大まかに言えば、「動物の解放」と「障害者の解放」を互いに関連付けて考察しようというものだ。曰く、「人間」は動物に対し、(定型発達)知能や二足歩行といった能力の欠如を根拠として支配や格差を正当化してきた。この「健常者中心主義」的な社会、いや世界のあり方を踏まえるならば、動物に対する抑圧の構造は、障害者に対するそれと同一視できるのだ。

また、本書は切実なノンフィクションでもある。病を患った介助犬と自身の相互依存関係に「うつくしい何か」を見出す語りは、先述の二冊にはない新たな地平を開いている。



身近な他者であっても「自分とは違うもの」とみなしてしまえば、その生に無関心になれてしまう。抑圧も格差も気にならなくなる。しかし、彼らを「違っだからこそ大切ないち存在」として真剣に扱うならば、今まで見ないふりをしてきた無数の同胞たちの生に気がつくだろう。「動物」に目を向けることは、人にも獣にも限らないこの地球の隣人に向けることと繋がっている。(朝露)

新刊コーナー

続 窓際のトットちゃん

黒柳徹子著
講談社

『窓ぎわのトットちゃん』を読んで受けた衝撃は今でも忘れない。小学生の時だった。前作の内容は、主に著者がトモエ学園で過ごした幼少期についてである。この学校の特徴は、一言にすると「自由」である。ほとんど日本で普及していなかったリトミックの授業や、裸でも良い水泳の授業など……当時小学生だった評者の目から鱗が落ちた。

本書は、そんな印象深い前作から四十二年越しの続編である。前作と同様、筆者の経験が中心であるものの、本書では家族や著者の経歴についてより詳細に描かれている。前半は主に戦時中の体験について。そして後半は疎開先の青森から東京に戻り、音楽学校での生活や、NHKに就職するまでの経緯など。その多くは、今では考えられないような、もしくは当時でも多くの人は辿らなかったような数奇な人生経験である。

筆者独特の感性から、自身の体験をどのように感じ、どのように描くのか。様々な突飛な行動をしてきた無邪気な「トットちゃん」の行動や感情を、大人になった黒柳徹子が冷静に、そして客観的に描写する。二つの視点を傍観者として見守る読者は、その感情に少し戸惑いを覚えるかもしれない。それでも、筆者の行動の根底にある両親へのリスペクトを非常に強く感じられる作品である。そんな心優しい、そして強い芯を持つ女性の人生のストーリーであることは、初めて手に取る人にも良く伝わるだろう。

(二五六頁 税込一七五〇円 10月刊)

(ブラチ)

メダリスト(9)

つるまいかだ著
アフタヌーンKC

ページをめくる手が震えている。次のページ、次のコマを見るのが怖い。それでも見届けなければならない。彼女たちの挑戦を。勝負の結末を。

本作、『メダリスト』は、何もできない少女・結束いのり^{いのり}と、選手としての夢を諦めた

青年・明浦路司^{あきら}が出会い、選手とコーチとして、フィギュアスケートの金メダルを目指す物語だ。同世代の日本一を決める大会に出場したいのり^{いのり}と司は、ライバルであり絶対王者、狼野光^{あきら}の演技を目の当たりにする。会場の空気を支配するほどの圧倒的な演技に怖気づくことなく、いのりは闘志を示した。本巻でついに、「最強」に挑む戦いが幕を開ける。

精緻な心理描写、積み重ねを意識したストーリーの重厚さなど、本作の魅力を挙げればきりがなが、漫画ならではの魅力を紹介したい。漫画においては、ページとページの間は強制的に情報が遮断される。自らの意思でめくらなければ、次の未来、登場人物たちの行動の結果を見ることができない。読者に能動性を要求するこの構造を利用し、心を揺さぶる体験を生み出している。フィギュアスケートにおいてはジャンプが占める点数配分が非常に高い。そしてジャンプの正否は着水の瞬間に決まる。鮮やかに跳ぶだけで終わりはしないのだ。着水の瞬間を、ギリギリまで隠し、読者の意思で見届けさせる。水上に絶対は無く、残酷な失敗を何度も見てきた読者は祈らざるを得ない。降りろ、降りてくれ、と。絶対的強者に挑んだ彼女の覚悟を、選択の果てを、どうか見届けてほしい。

(一九二頁 税込七五九円 10月刊)

(茂)

恋できみが死なない理由

最果タヒ著

河出書房新社



「一目惚れ」なるものが存在するのかわからないし、世間が騒ぐほどのその尊さもよくわからない。ただ少なくとも私は最果タヒに「一目惚れ」して、私にとつて私だけの価値が生まれた事実には揺るがない。

本書は詩人・最果タヒによるエッセイ集だ。可愛らしいショートケーキが表紙に踊る。

「恋の甘さ酸っぱさはほろ苦さがポップにしっとり綴られているんでしょ」なんて、まさかそつお思いですか？ 実はこのケーキ、相当な劇薬につき取り扱いにはご注意ください。

彼女は言う。「愛の気持ち悪さへの肯定を、愛の美しさや稀さを根拠に、相手に請求するのは愛がない」と。彼女は「愛」や「恋」という言葉の響きに安易に身を委ねることはない。それは「自分自身にもわからない」「自分」を、他人にわかってほしいからと簡単に解釈してしまう時、なにかを殺していっているように私は思う」から。

そうして生まれた彼女の言葉は「自らの足

元を照らすために生み出された光」のようなもので、個性性を突き詰めた先に宿る普遍性が浮かび上がる。「一人だからこそ、二人は二人のまま、無理に同化せず、共感のまねごとなどしなくても、隣にいらることができんだ」——剥き出しの言葉は孤独で、温かい。

彼女と同じ時代に生きていて幸せだと思う。常にも「私だけの」最果タヒと出会えるから。私は仕事柄、引用したいと思った箇所に付箋を貼りながら本を読む。そしたらほぼ全てのページに付箋が付いていた、そんな本です。ぜひ「あなただけ」の最果タヒを。(浅煎り)

(一七六頁 税込一四三〇円 10月刊)

鬱の本

点滅社編集部編

点滅社



不思議な本だ。帯の背にひとこと、「読めない時に」と書いてある。それきり。だが読み進めると、徐々にその意味が分かってくる。本書はまぶつことなき、読みたくても読めない人のための、処方箋的本だ。

八四人の著者による、「鬱」と「本」を取

り巻くエッセイ集。誰もが知っているような小説家や詩人が書いたものもあれば、歌手や画家、コーヒー屋の店主に肩書き非公開の人など、普段文章を書くことを生業としていないような人まで。てんでバラバラな誰かの、小さな物語が散りばめられている。

誰かの何でもない日の、ぼんやりとした憂鬱と、それと共にあった本が綴られている。読んでいて気づいたのだが、鬱は何気ないところにはか宿らない。見るからに悲惨な出来事とか、大声で叫んじやうようなストレスはもはや鬱ではない。鬱とは例えば、眠れずに散歩に出かけた時の草木の匂いだったり、小さい頃読んでもらった絵本の不安げなストーリーだったり、夕方のニュースが耳障りで落ち着かないことだったりする。私たちは普段、こつした自分だけの陰鬱さを人に見せまいとしている。だからこそ本書を読むと気づく。誰もが奥底に素朴な不安を抱えていること、そして、そのために本があるということ。

一編のエッセイが見開きページに収まっていて、「読めない」時に寝てべって、手当たり次第にページを開くのちやうどいい。エッセイを最後まで読まなくなつて、途中から読んだっていい。誰かの言葉に触れることで心がちょっと軽くなる本。

(一九五頁 税込一九八〇円 11月刊)

うれしい近況

岡野大嗣著
太田出版

短歌は日常を切り取って別の知らない世界にしてくれるから好き。知らないというか、目に映しても脳に映していなかったというか。認識とはずれているけれど言われてみると確かに！ となるのが爽快なのだ。

短歌の切り口は様々だけれど、岡野大嗣の短歌は沢山の色の光を反射するきらきら暖かいカケラたち、という印象だ。丸みを帯びたものが多いけれどたまに尖ったものがあった、油断していると血を舐めることになる。

本作もそのような彼の持ち味が存分に味わえる。新たな試みとして、今回は短い小説が収録されている。「FMオレンジ」。幼いまるの目を通して世界を描く。「大きなあくびをするように夕日がとつぜん明るくなって、まるの目にうつる全部がオレンジに染まりました」。空にたゆむう鳥のむれ、道路の「とまれ」の白、ハンドルをきつこにぎるおかあさんの日よけの手がくろく、となりで寝息をたてているおとうこのよだれ、トンネルのあたり。ど

れもオレンジで、どのオレンジも違う色。透明でまっまるな目に輝くことができる作品だ。音楽に纏わるものが多いのも岡野短歌の特徴だ。「シールドをギターアンプに差すとき引くようなアウトロを抱きしめてから告げる曲名」なんて痺れる。「捨てるため傷つけたCD-R光が春を連れ戻しむ」は大人になつてCD-Rを整理している時の優しい切なさを思う。青春を支えてくれた音楽が傷から空へ溶け出すようで美しい。この歌集も何年何月何日の貴方にも寄り添う一冊だと思う。

(黄丹)

(一四四頁 税込二〇〇円 10月刊)

奇病庭園

川野芽生著
文藝春秋

「この物語は何の意味もない言葉で、何の意味も持ったことのない言葉で、綴られるべきなのだ。ほんとうは」。伝えようと言葉にした瞬間に、伝えなかったことが言葉の持つ意味に押し込まれ、思い通りに伝えられない感覚を覚えたことはないだろうか。

本書からは、著者・川野芽生氏のありったけが、日本語では(あるいはほとんどんな言語でも)表現し切れないことが痛いほど伝わってくる。本書を読むと感ずることがもう一つある。それは、現実世界が「普通」という曖昧さの上に成立しているということだ。この「普通」は、空気のように存在している。例えば、人間なら言葉は通じるものだ、子を孕むのは女にとつて最上の幸せだ、美人なら苦しみと無縁だなど。だが、誰が「普通」を定めたというのだろうか。例に挙げたものを含め、「普通」を揺さぶり、その曖昧さを露呈させる話が多く登場する。

三二編の短編が織りなす幻想小説である本書は、「奇病が流行った」の一文から始まる。奇病により人々は角や翼を失った。患わなかった者たちが患った者たちを庭に囲った結果交配が進み、角も、翼も、鉤爪も、尾も、鱗も、毛皮も、魂も持たない一群が誕生した。しかし、この集団の中に、失ったものを再び備える者たちが突如現れ、庭を恐怖に陥れたこの物語は、その様子を具に描く。ただし、失ったものを再び備える者たちの視点から。無意識に内面化した「普通」を壊し、庭の境を越えるのはどうだろうか。本当は、あなたには角も翼も何もかもあるのだから。(前巻)

(二四八頁 税込二二〇〇円 8月刊)

戦争

ルイリフェルディナン・セリーヌ著

森澤友一朗訳

ルリユール叢書



一九三二年に、その第一作を「もう何も言うことはない」と締めくくったセリーヌ又は、それにもかかわらず一九六一年の死の前日まで何事かを言い続けて止まなかった。そして死後六〇年を経て、盗難されていた原稿が発見された。彼はいま一度、死してなお地獄の底から叫びはじめ――

先に触れた第一作の『夜の果てへの旅』で曖昧にぼかされていた時期を描くこの作品は、第一次大戦の酸鼻で幕を開ける。戦争の景色を一夜にして変えてしまった大殺戮をなんとか逃げのびた主人公フェルディナンは、負傷で朦朧とした意識のまま野戦病院に収容されるが、そこはもう一つの地獄に他ならなかった。隣のベッドに居合わせた同じく負傷兵であるベベルとともに、不気味に醜い人々の間を縫って、二人はもう一つの「夜の果て」へと赴くことになる。

だが、この作品を特徴づけるのはなにもその悲惨さばかりではない。セリーヌの特徴で

ある猥雑な語りは、日本語に移し替えられてなお独特のリズムを保って心地良いし(翻訳者に拍手を)、そして醜さを突き抜けた先には現代の言説における禁じ手と化しつつある、異様な笑いが漂う。

とまれ、文体を武器とする小説については、作品の言葉そのものに語らせるほかないのかもしれない。セリーヌと会見したある研究者は、かつて彼を「一眼巨人」だと言ってみせた。私たち読者もまた、あるかなきかの目を全力で見開いて、そのような彼の姿を見つめ返さねばなるまい。(投稿・コーク)

(二七二頁 税込二七五〇円 11月刊)

ためさるる日

井上正子日記1918―1922

井上正子著 井上迅編

法蔵館



「二〇一七年の春、徳正寺の境内にある

六角堂(納骨堂)の

片づけをしていると、

須弥壇の下の収納奥深くから埃をかぶった六冊の日記帳が出てきた。薄暗い堂内でそれを開けると、女学校に通う大伯母の多感な十代

が現われてびっくりにしてしまいました。」

徳正寺は、京都の四条通を少し下った四条富小路に佇む真宗大谷派のお寺。その住職である本書の編者・井上迅はある日、大伯母にあたる井上正子(一九〇六―一九九八)の日記を発見した。二二歳から一六歳に至るまでの日々の生活を綴った日記――それは百年前の京都を生きたひとりの女学生の悲喜ともどもを伝える、貴重な資料だった。

大文字山や三条大橋、丸善や大丸など、聞き馴染みのある地名や建物が各所に登場するためか、遠い時間を生きた正子のごが今では身近に感じられる。正子が百年前に歩いた道を自分も今歩いているのだ、そのことが意識されたとき、私は不思議な感覚に陥った。

それは過去がそのまま現在に流れ込んでくるような、そんな感覚だった。正子の生の痕跡は、京都のそこかしこに今もまだ残されている――読後、そうした思いが頭から離れない。

日記を読むと、正子の「死」に対する意識の鋭敏さに驚かされる。一九二二年九月二日の日記――「夏中を私等を毎朝毎朝染じまして呉れた、朝顔の淋しい末路を見た時、又生の空虚さを考えさせられたのでした」。正子はその後、おそらくは多くの喜びと悲しみを経験しつつ、九一歳でこの世を去った。私は彼女のことを記憶し続けたいと思う。(はや)

(四六四頁 税込三〇八〇円 11月刊)

西洋の護符と呪い

プリニウスから

ポップカルチャーまで

尾形希和子著 八坂書房



コロナ禍の真只中、疫病封じの妖怪「あまびえ」に注目が集まった。人は、

人知の及ばぬ禍に面するとき、超自然的存在に頼ろうとする。古代より、人間生活にはこうした呪術的思考が根を下ろしてきた。その思考の結実である芸術的表象や風習に目を留めながら、本書はイタリアを中心とする西洋諸外国の「魔除け」、ひいてはその地に住まう人々の精神性を物語る。

長い人類史において、力を与える、と信じられてきたものは数多い。そのなかから本書が取り上げた事物は八つ——角、赤、石、薬草、目、結び目、生殖、聖人。いずれも現代に至るまで効力を失うことなく、人々の願いを託され続けてきたものたちだ。

薬草の力を例に挙げよう。かつて、疫病対策や悪霊退散には香り袋が有効とされた。芳しい香によって、腐敗した空気が浄化されると信じられたのである。これを単なる迷信と切り捨てることはできない。ハーブが抗酸化

作用や抗菌作用といった効果をもつのは、今では周知の事実なのだから。また、一七世紀イタリアでは、ハーブを漬け込んだアルコールが、薬草の力に対する祈願を込めてこぼされた、「奇跡の水」と。そしてこの現代、コロナ禍の中で、あるフランスの香水博物館がこの「奇跡の水」を再び作り始めたという。護符や呪いといった超自然的力を信じるのと、それは単なる妄信ではない。人間の脆さ、現世界の脆弱さを理解したうえで、自然の一部として生きていく道を模索する第一歩なのだ——著者の思いが胸に響く。(はらん)

(二四〇頁 税込二四二〇円 7月刊)

所有と分配の人類学

——エチオピア農村社会から

私的所有を問う

松村圭一郎著 ちくま学芸文庫



あるエチオピアの農村、滞在先の大家が自分のラジオを持って行ってしまった。

これは「わたしのもの」ではなかったのだらうか——その些細な違和感をきっかけにして、著者はあたりまえにあるものだと思っていた「私的所有」を問い直すことになる。

『くらしのアナキスム』などで知られる文化人類学者・松村圭一郎の「博論本」が文庫になって復刊した、それが本書である。

博士論文がもとになっているだけに、緻密な事例の記述が紙幅の大部分を占めている。畑を耕す小作と地主の間での収穫物の分配、物乞いに対して感じるうしろめたさ、複雑な家族内での土地相続のせめぎあい、後から村にやってきた「国家」による統治、所有と分配に関するミクロな事例を収集し、検討を重ねる。その中で浮かび上がってくる「所有」の形態は、国家や法によって一つに定まるものではなかった。地域の慣習や規範、信仰、そして妬みやうしろめたさといった感情が相互に作用し、その時々に変形されていくのだ。

日常から事例を集めて、そこで何が起きていたかをひとつひとつ解釈していく。やがてそれぞれの意味が結び付くと、自明視していたものが足場から崩れていく。このプロセスこそがまさに文化人類学の営みであり、前提から全てを覆される知的興奮が本書にはある。本書で記述されるエチオピアでの経験は、

近年の松村のアナキスム論の源流でもある。あたりまえをさらりと壊してしまうから、彼の文章は読まれるのだらう。(たいやき)

(四四八頁 税込二六五〇円 11月刊)

体育がきらい

坂本拓弥著

ちくまプリマー新書

突然だが、体育の授業は好きだっただろうか。あなたは体育好きだったとしても、「本当に嫌だ」「何でこんなことをやらされるんだ」とふくれっつらをしている友人が身近にいなかっただろうか。この「体育がきらい」の問題に、誰よりも真剣に向き合っているのが著者だ。「体育哲学」なる学問を専門にし、自身も学生に体育やスポーツを教えている。

著者は、現代の日本の体育教育の様々な問題点を指摘し、『体育』なんて好きにならなくともいい」と、繰り返し語る。規律を守らせることが体育の本質でないのももちろん、体育＝スポーツというのも間違っている。本来の「体育」とは「賢いからだの使い方」を学ぶ場なのであり、球技や体操はそれを体得するための手段の一つに過ぎない。

人との握手の仕方や場に適切な声の出し方、リラクセスできる寝方なども「体育」だとする著者の主張は興味深い。欲を言えば実践例をもう少し見たかったが、よりよく生きるために、私たちはどのようにからだ向き合えば良いのかを、考えさせられる一冊。(荒漢)

(二二四頁 税込九六八円 10月刊)

近代美学入門

井奥陽子著

ちくま新書

「もの感じ方は歴史的に形成される」と著者は指摘する。我々の価値観は育ってきた文化や思想の影響を受ける。そして何を美しく感じ、何を芸術とみなすかも例外ではない。我々が美や芸術について抱いている常識の多くは、近代西洋で成立した価値観であり、普遍的なものではないのだ。

本書では、一七世紀後半から一九世紀初頭を中心とした、西洋近代美学思想史の変遷が綴られている。芸術概念の誕生から始まり、職人から区別されるかたちでの芸術家の誕生、そして美の自律が説明される。さらに、西洋近代美学を象徴する風景の美、崇高とビクチャレスクを通じて、近代における大きな美意識の転換が示される。

芸術や美といった感覚的で曖昧な概念が歴史的経緯とともに整理されることで、すっきりとした形で理解できる。加えて、各章の最後には、近代美学の抱える問題や、派生した価値観が紹介され、型にはまるだけではない柔軟な姿勢を示してくれる。自らの価値観を再考するきっかけとなる一冊。(茂)

(三三〇頁 税込二二〇円 10月刊)

社会学の新地平

ウェーバーからルーマンへ

佐藤俊樹著 岩波新書

マックス・ウェーバー（プロテスタント倫理と資本主義の源流）、『プロ倫』の著者にして日本で最も有名な社会学者だろう。しかしどうだ。もしも従来のウェーバー像が一新されるのだとしたら……。

著者曰く、これまでは『プロ倫』の訳者・大家によるマルクス主義的なウェーバー読解が主流であった。しかし著者は海外の最新の研究動向を踏まえ、真にウェーバーが向き合おうとした謎——「資本主義の精神」とは何か？——を、精緻な資料読解に基づき再構築していく。その鍵となるのが現代の社会学の巨匠・ルーマンだ。難解な社会学システム論で知られる彼は、「合理的組織」への着目においてウェーバーと意外な共振を見せる。そこにこそ、「資本主義の精神」の謎は潜む。

本書は専門的な議論も多く、初学者にはややハードルが高いだろう。しかし、古典から新たな古典に通底するミッシング・リンクを解き明かしていくその手腕は、学術的興奮をかきたてやまない。『プロ倫』の現代のな可能性を切り拓く本書——新地平を謳うそのタイトルに偽りはない。(浅煎り)

(三三〇頁 税込二二七六円 11月刊)

伝わりと嬉しい。

「ひびく!!! 私立の受験日へっ!!」

クリスマスが終わって初雪が舞う時期、『正反對な君と僕』（ジャンプコミックス）の元気な女子高生・鈴木さんの一言である。例えば、誰かと寒さを共有したいとき、大きな声で叫んでみたり、身振り手振りで表現してみたりする。もしくは、鈴木さんみたいに、どのへんが寒いのか言葉で伝えてみることもできる。

何か一つ伝えたいことがあるとして、その伝え方は無限にあり、そして、言葉で伝えるとしたらこれもまた無数の選択肢からある一つの言葉を選ぶことになる。加えて、相手は自分とは別の人間だ。別の場所で別の時間を過ごしてきた他人である。コミュニケーションとは本来とても難しいものだ。無限の選択肢の中から一つを選んで、自分とは別の人間に何かを伝えるということが簡単なはずがない。では諦めてしまおうか。否、それはもったいない。そう思わずにはいられない二つの作品をここに紹介したい。

一作目、『冒頭の台詞が登場する』『正反對な君と僕』は、とても明るい、しかしいつも空気を読んで振舞ってしまう鈴木さんが、物静かだが、他人に流されない谷くんは片思いしているところから始まる。周りの目が気になる鈴木さんは谷くんに普通に話しかけることができない。「谷くんは懂れているのに、私は谷くんとは真逆の人間なのだ」と自己嫌悪気味の鈴木さんだが、彼女はそこで止まらない。谷くんに対しても、周りの友達に対しても、言葉を風へんに伝えてみようとする。自分とは『正反



對」の他人と関係を築くその姿勢はとても誠実だ。そして鈴木さんの周りの愉快な友達もそれに心える。作中飛び交う言葉はとても軽やかで、しかし忘れがたいものばかりだ。こうして描かれる彼らの日々は、隅々まで愛おしくて目が離せない。

続いて、『氷の城壁』（ジャンプコミックス）も同じく舞台は高校生活。一人が気楽で、他人に踏み込まれたくない小雪に、良かれと思って距離を詰めてくるミナト。そんなミナトに対して小雪は壁を作る。これまで理屈で相手を理解できると思っていたミナトだが、小雪と関わる中で思い至る。「違い過ぎるんだ、価値観も考え方も、俺にとつての正解と、あの人にとつての正解が違い過ぎる」と。お互いが違い過ぎると気付いたところから関係は始まる。本作は、ぎこちない言葉が少しずつ彼らの関係を变えていく。そこがとても良し。

それにしても、寒さを形容する表現として「私立の受験日だよ」とは、なんて絶妙な表現だろうか。その寒さが一瞬で想像できてしまう。一年の中で寒い日はたくさんある。だが、お正月やスキー合宿、学年末試験とかよりも、「私立の受験日」が一番良く分かる気がする。二つの作品の作者・阿賀沢紅茶先生は、繊細な心の動きを、読者が「ああ、それだ!」と思う絶妙な言葉でもって表現する。だから、高校生活が遠い過去になりつつある今日この頃だが、そんな言葉の一つ一つがああ頃の自分を拾い上げてくれる気がするのだ。そして、他者とのコミュニケーションを諦めてしまいたくなるとき、それでもやっぱり、と思わせてくれる。



菌類のススメ

こんにちは。早速ですが、これからあなたの脳に色々な菌が押しかけます。よろしければ彼らにあなたの脳の片隅を貸してあげていただけませんか？ 愉快な子たちなので、きっと楽しいと思います。それでは、少しの間お世話になります。

最初にやって来たのは『もやしもん』の子たちです。本作はもやし屋（種麹屋・酒や味噌といった発酵食品の原料となる麹菌を生産し、酒蔵などに卸す）の次男坊・沢木惣右衛門直保くんと仲間たちによる、農大を舞台にした漫画です。この沢木くん、菌が見えます。彼の目を通して見る菌たち、とてもかわいいです。ぬいぐるみみたいにゆるーいのです。口癖は「かもすぞー」。例えばアスペルギルス・オリゼー（黄麹菌）は沢木くんが幼少の頃から美家の蔵で一緒に遊んでいて、いつも彼の頭や肩に乗っかっています。サッカロマイセス・セレビジエは酒造りに欠かせない酵母。糖からアルコールをつくりまします。分裂増殖するとおでこにポコッとおでまがで



のがキュート。『もやしもん』の世界はゆるく楽しいです。皆で日本酒造ったりフランスのワイン蔵へ行ったりミス農大したり。急にグッと来るシーンが出てくるのがすごい。「食糧自給率を上げなければいけない」「農薬を使っちゃいけない」などの定型文に対し、ちょっと違うところを描いているのもポイント。登場人物たちが自分でも考え調べる人たちで、そこに著者・石川さんの美学が反映されています。かっこいい。他にも地ビール回に実在のビール職人さんたちに協力を募った企画や単行本でも欄外が充実している話など話の種は尽きませんが、字数の都合上、一旦次の菌たちを呼んでみますね。

はい、お次は『もやしもん』と感染症屋の気になる菌辞典』の面々です。あれ、さっきぶりですね。今度は彼らが漫画から出張して、ホモサピエンスの感染症に関わる微生物（注：菌だけではありません）たちを紹介してくれるそうです。本文は感染症医の岩田さん（イワケン）が担当。「世の中には無数の微生物がいて、その全てに「物語」がある」という前書きのお言葉が評者は大好きです。二頁で二つの微生物を扱う形式なので、枕元の一冊におすすぬ。毎日一微生物。ちなみにオリゼーはほぼ出さずっぱりです。働きたー。

ん？ 青い服を着たウサギが前を走って行きましたね。ちょっとついて行ってみましょう！ という訳で辿り着いたのは『MOE二〇二〇年六月号』です。さっきの子はピーターラビットで、ここでは彼らの特集をやっている模様。「本言はけっこうフラックなピーターラビット」なんて気になりますね、こんなに愛らしいのに。とこでどつとして急にウサギ？ と思ったら、著者のピ



アトリクスはきのこの神秘に心惹かれていたぞう！ 担子菌ハラタケの論文も提出しましたが、当時の学会では女性は学者として認められず、菌類学者の道を断念したといえます。しかし、彼女が描いた何百枚もの美しいきのこの細密画は現代でも研究に役立てられています。美しいきのこの画といえは『きのこ（ちいさな手のひら事典）』もぜひ！ かわいく妖しいきのこの世界に一緒に没入しませんか？

さて、そろそろお別れ時。はじめより少しでも菌たちに親しみを持っていただけいたら嬉しいですね。よかったらまた、菌たちと遊んであげてください。それでは皆で「ありがとー！」

（黄丹）

編集後記

新年となりました。今年もどうぞよろしく
お願いいたします。

さて、私前髪が編集後記を書くのは入会の
挨拶ぶりですが、今年の4月号をもって退会
するためこれが最後の挨拶となります！

告白すると、私は学部生になるまで、ほと
んど本を読んできませんでした。これは実家
に本が一冊もないことや「本は邪魔になるか
ら買わない」という環境で育ってきたことが理
由でしょう。なので、綴葉に入るまでは本の
購入自体に罪悪感を抱いていました。

しかし、綴葉に入って本を買ううちに、罪
悪感は薄れ始めました。綴葉読者の皆様の目
には私のような人間は奇妙に映るでしょう。
本を買うのに躊躇するなんて、と。ですが、
世の中にはそうした人間もいるのです。そし
て、私は本を買うことに躊躇いを覚える方
の後押しになりたいと密かに思い、書評を書き
続けてまいりました。この目的をどれだけ果
たせたかは分かりませんが、私の書評に少
しでも心動かされ、紹介した本を手にとって
くださった方がいらっしやれば嬉しいです。

今までありがとうございました。後ろ髪引
かれる気持ちはありますが、頼もしい編集委
員の方々に後を託します。残り2ヶ月程です
が、前髪の書評、お見逃しなく!! (前髪)

当てよう! 図書カード

今年度からドイツ語の非常勤講師を始めま
した。悪戦苦闘の毎日です。学生にドイツ語
を教えるなかで、改めて面白いなと思った
言葉があります。“Gift”というのがそれです。
英語だと「贈り物」を意味するこの言葉。ド
イツ語では何を意味するでしょうか？

1. 酒
2. 毒
3. 鼠
4. 死

(ばや)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、
生協のひとことポストに投函してください。
下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも
可能です。正解者の中から5名の
方に図書カードを進呈いたします。
応募締め切りは3月15日です。



《10月号の解答》 10月号の問題の正解は、
4. の船の上でした。ちなみにこの船は日本
に向かうもの。アインシュタインはラフカデ
ィオ・ハーンの小説を読み、日本に強い憧れ
を抱いていたそうです。図書カードの当選者
は、えび天天さん、JAFさん、いわさきさん、
ぬんぼさん、やまさんの5名です。おめでと
うございます。(茫漠)

読者がらひついで

○評者ご自身の専門分野がちらりとのぞく
評、おもしろいです。一冊の本に対して異
なる分野の複数人が評する企画など読んで
みたいです。(文学研究科・青でんぶ)

— ありがとうございます！ 様々な分野の
学生が集まっているという特徴を生かした書
評誌になればと考えています。自分の専門に
近い本ほど、迂闊なことは書けないぞと悩ん
でしまうことも多いですが……。

また12月号の特集では、専門分野や興味
異なる人と一つの本を書評する試みを行いま
した。楽しんでいただければと思います。

○特集のテーマが毎回楽しく、知らない本を
たくさん知れるから良い。(理学部・えび天天)

— ありがとうございます！ 評者も、特集
を通して様々な本に出会っています。(茫漠)

訂正とお詫び

『綴葉』12月号 (No.423) の新刊紹介にお
いて、九頁『祝福』の著者名に誤りがありま
した。正しくは、「高原英理」です。著者の
方をはじめ、関係者の皆様にご詫び申し
上げます。